

## 国立教育政策研究所資料に基づいた、 小学校外国語「話す」領域の評価に関わる教員研修

松井 孝彦\* 松井 千代† 高原 大地\*\* 小田 貴也\*\* 高木 智香\*\*

\*外国語教育講座

### Teacher Training on Evaluation of Speaking Skill for English language Education in Elementary Schools: Based on the Reference Material of NIER

Takahiko MATSUI\*, Chiyo MATSUI†, Daichi TAKAHARA\*\*,  
Takaya ODA\*\*, and Chika TAKAKI\*\*

\* Department of Living Environment Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords : 小学校英語 評価 教員研修

2020年度から小学校では新学習指導要領が施行され、外国語活動と外国語の授業が担任教員や専科教員主導のもと行われている。新学習指導要領で求められる英語教育は、授業を担当する教員自身が中学校や高等学校で受けた教育とは異なることが多く、3・4年生対象の外国語活動における文字を介さない「話す」「聞く」活動の指導や、5・6年生対象の外国語における文法用語を用いない指導をどのように行えばよいか、戸惑いを見せる教員がいる。そのため、各地区教育委員会主催の研修や、教員が自主的に組織した研究会では、指導法に関する内容が扱われることが多い。

同様に、筆記テストに因らない評価をどのようにすればよいか悩んでいる教員もいる。外国語における「知識・技能」に関する評価項目や「思考・判断・表現」の評価基準について、適切に設定をすることができないという教員の声を耳にすることが多い。現段階における、教員自身の英語の評価経験の少なさや評価事例の蓄積の少なさが原因になっていると思われる。

筆者らは、これまでも現職教員を対象として、指導法や評価方法に関する研修を行ってきた。しかし、評価方法に関する研修では、2020年に公開及び出版された『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校外国語・外国語活動編』<sup>1)</sup>

(国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2020; 以下「参考資料」と称する)に示されている評価方法を基にしてはなかった。そこで、「参考資料」に基

づいた小学校外国語「話すこと [発表]」の評価に関する新たな教員研修プログラムを作成し、2021年8月に教員研修を行った。本稿では、その研修内容と研修を受けた現職教員からのフィードバック、そして、今後の評価研修に関する課題を報告する。

#### I 先進事例の調査

小学校外国語の評価に関する研究はいくらかなされおり、特に新学習指導要領の「話すこと」に関わる研究では、横坂・松崎(2021)<sup>2)</sup>、岡崎他(2021)<sup>3)</sup>、赤沢(2021)<sup>4)</sup>、太田(2020)<sup>5)</sup>が見られた。しかし、評価基準を設定し、児童の発話に基づいて教師が評価を行っている事例は横坂・松崎(2021)と岡崎他(2021)のみであり、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を評価項目としている事例は横坂・松崎(2021)のみであった。この横坂・松崎(2021)に関しても、児童の具体的な発話事例を示し、その事例を基に評価をしている記述はなかった。

教育委員会の資料について見てみると、例えば山形県教育庁義務教育課<sup>6)</sup>や熊本県教育庁教育指導局義務教育課<sup>7)</sup>が作成したものは、「参考資料」を抜粋した内容となっており、具体的な児童の発話及びそれに基づく評価方法については記述されていなかった。

以上のことから、評価基準を作成する場合、「参考資料」以外に参照をすることができる資料は、現段階

†愛知淑徳大学 Aichi Shukutoku University, Nagakute 480-1197, Japan

\*\*大学院学生 Graduate Student, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

ではほとんど見当たらないと考えられた。

## Ⅱ 国立教育政策研究所作成資料による評価

### 1 「話すこと〔発表〕」の評価規準作成について

「参考資料」では、小学校学習指導要領第2章第10節外国語の「第2各言語の目標及び内容等 英語1目標」を受け、「話すこと〔発表〕」について、表1のような評価規準を作成している。

表1 「話すこと〔発表〕」の評価規準  
(国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2020)

<b>[知識]</b> 英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。
<b>[技能]</b> 実際のコミュニケーションにおいて、日常生活に関する身近で簡単な事柄や自分のことについて話す技能を身に付けている。 身近で簡単な事柄についての自分の考えや気持ちなどを話す技能を身に付けている。
<b>思考・判断・表現</b> コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常生活に関する身近で簡単な事柄や自分のことについて話している。身近で簡単な事柄についての自分の考えや気持ちなどを話している。
<b>主体的に学習に取り組む態度</b> 外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に英語を用いて話そうとしている。

この評価規準を基にして教科書の各単元における具体的な評価規準を作成する際には、表2のようなフォーマットを用いている。

表2 「話すこと〔発表〕」評価規準のフォーマット

<b>[知識]</b> 【言語材料】について理解している。
<b>[技能]</b> 【事柄・話題】について、【言語材料】などを用いて、【内容】を話す技能を身に付けている。
<b>思考・判断・表現</b> 【目的等】に応じて、【事柄・話題】について、簡単な語句や基本的な表現を用いて【内容】を話している。
<b>主体的に学習に取り組む態度</b> 【目的等】に応じて、【事柄・話題】について、簡単な語句や基本的な表現を用いて【内容】を話そうとしている。

「主体的に学習に取り組む態度」については、表1と表2で記述内容が異なるように見える。各単元においてコミュニケーションを行う目的や扱う話題等を具

体的に記述する際、表1の「主体的に英語を用いて話そうとしている」という記述箇所を具体的な状況に置き換える必要があるため、表2のような記述になると考えられる。

### 2 「話すこと〔発表〕」の評価基準作成について

「参考資料」には、具体的な評価基準表は記載されていない。しかし、「参考資料」内の事例2・3・4を見ていくと、表3のような基準があると考えられる。なお、C評価については、B評価に満たないものと考えられている。

表3 「話すこと〔発表〕」評価基準の考え方

<b>[知識・技能]</b> A評価：既習表現がすべて正しい。 B評価：既習表現についてわずかながら間違いがあるが、内容がおおむね理解できる程度に正しい。
<b>[思考・判断・表現]</b> A評価：（自分のことを）より伝えることができている。情報を付加して話そうできている。 B評価：（自分のことを）モデル例にそっておおよそ伝えることができている。
<b>[主体的に学習に取り組む態度]</b> A評価：（自分のことを）より伝えようとしている。情報を付加して話そうとしている。 B評価：（自分のことを）モデル例にそっておおよそ伝えようとしている。

## Ⅲ 2021年度版研修用資料について

### 1 過去に作成した資料との違い

筆者らは、2017年度及び2019年度にも「話すこと〔発表〕」の評価に関わる教員研修用資料を作成している(松井他, 2018, 2020)<sup>8) 9)</sup>。2021年度版資料と過去の資料の大きな違いは「学びに向かう力・人間性等」に関わる点である。

2017年度には評価の観点では明確には示されていなかった。また、小学校外国語科学習指導要領には、身に付けさせたい資質・能力の3つの柱の中の「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」は整理されていたが、「学びに向かう力・人間性等」に関する記述はなかった。そのため、「第1節 外国語科の目標 第1目標(3)」にある「他者に配慮しながら」の解釈について検討をした。その結果、平成20年(2020年)小学校学習指導要領解説外国語活動編<sup>10)</sup>及び平成29年(2017年)小学校学習指導要領解説<sup>11)</sup>の外国語活動に書かれていたジェスチャーや、平成29年の解説の「思考力・判断力・表現力等」で明示されている「聞き取りやすい声」「動作を交え」「明瞭な聞

き取りやすい声の大きさ」といった文言を参考に、従来の中学校や高等学校の英語教育において評価項目としてよく取り上げられていた「声の大きさ」「話すスピード」「明瞭さ」「アイコンタクト」「ジェスチャー及び写真や英の使用」を評価の観点として取り入れた。また、「既習の語彙や表現の使用」も他者理解を促すと考え、評価の観点として当時採用した。

これらの非言語能力については、2019年度版及び2021年度版の資料に評価の観点として含まなかった。2019年度版を作成していた2019年7月段階では「他者への配慮」がどのように扱われるか明確に示されていなかったため、非言語能力を評価の観点としなかった。また、「参考資料」では、ジェスチャーを評価の際に考慮している記述が事例2及び事例3に見られるものの、積極的に評価の観点としていないこと、及び他の非言語能力に関わる記述がないことから、2021年度版においても評価の観点としなかった。

また、2019年度では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価として学習調整の観点が示されたため、以下のような資料を作成した。

- ・ 動画 1：単元途中におけるミニパフォーマンスにて、知識・技能がB評価になるもの
- ・ 児童の振り返り用紙：できなかったことを明示し、できるようにするための学習方法について書かれたもの
- ・ 動画 2：単元末のパフォーマンステストにて、動画1の姿が改善されたもの

しかし、「参考資料」を見ると、単元末のパフォーマンステスト（動画2）を詳細に分析して評価することができればよいことが分かったため、2021年度は学習調整を意識した資料を作成しなかった。

## 2 2021年度版「話すこと〔発表〕」評価研修用動画について

教科書については、筆者らの勤務校のある愛知県で採択されているNEW HORIZON Elementary<sup>1,2)</sup>を使用することとした。また、6年生のUnit 4を研修用の題材とした。

まず、表1及び表2を参考に、本題材の評価規準・基準を作成した（表4）。

次に、Unit 4の各ページで学ぶ内容と、その学びの結果として完成するスピーチの、モデル文を解説する資料を作成した。なお、教科書のモデル文は以下のようなものである。

### 【モデル文1】

Hi, everyone.	
I went to the sea.	[行った場所]
I enjoyed swimming.	[楽しんだこと]
I ate watermelon.	[食べたもの]

It was great.	[感想]
Thank you for listening.	

### 【モデル文2】

Hi, everyone.	
I went to Lake Biwa.	[行った場所]
It was large.	[場所の説明]
I enjoyed fishing.	[楽しんだこと]
It was exciting.	[感想]
Thank you for listening.	

※「食べたもの」の代わりに場所の説明を述べる

最後に、評価研修に使用するためのスピーチ動画を計10本撮影した。

「知識・技能」の評価については、文や文構造においてA評価とB評価になるものを作成した。音声面に注目する動画を作成しなかった理由は、実際の児童のスピーチを観察したところ、文・文構造の評価と音声面の評価がほぼ一致する傾向が見られたためであった。児童は授業内で多くの発話練習を行っている。そのため、慣れ親しんだ表現に関しては、文・文構造も音声もA評価になることが多い。文・文構造がA評価であるが音声面にB評価が現れる例としては、児童が自分の考えや気持ちを述べる際に、辞書で調べた表現を用いるときであった。こういった例は実際の授業ではそれほど多く現れることはないため、今回は音声面に注目する動画を作成しなかった。

「思考・判断・表現」の評価について、表3に示されているように、情報量に差のある動画を作成した。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、原則として「思考・判断・表現」の評価と同じになるが、自分のことをより伝えるために他者へ“Do you have any questions?”と問うことでA評価となる動画も作成した。この場合、「思考・判断・表現」の評価もAとするかどうかについて筆者らの間で検討をしたが、話者自身が自ら情報を加える場合と、他者（聞き手）から情報の提示を求められる場合とにより評価を区別することとした。この考え方が適切かどうかについては、今後議論が必要であると考えられる。

動画の内容は表5のようなものとなった。

## IV 2021年度教員研修について

### 1 教員研修の日程について

- ・ 日 時： 2021年8月下旬
- ・ 場 所： A市研修会場
- ・ 参加者： 小中高の学校教員
- ・ 研修内容：
  - ・ 小学校外国語活動・外国語の目標確認
  - ・ 教科書の構成確認と指導のポイントの確認
  - ・ 評価項目の確認と評価演習

表4 2021年度版「話すこと〔発表〕」評価規準・基準

	「参考資料」参照による評価基準	本題材の評価基準 (Unit 4)	A評価	B評価	C評価
知識・技能	<p>[知識] 英語の特徴や決まりに関する事項を理解している</p> <p>[技能] 実際のコミュニケーションにおいて、日常生活に関する身近で簡単な事柄や自分のことについて話す技能を身に付けている。身近で簡単な事柄についての自分の考えや気持ちなどを話す技能を身に付けている。</p>	<p>[知識] I went to ～., I enjoyed ～., I ate ～., It was ～. およびその関連語句などについて、理解している。</p> <p>[技能] I went to ～., I enjoyed ～., I ate ～., It was ～. およびその関連語句などを用いて、お互いの考えや気持ちなどを話す技能を身に付けている。</p>	<p>[知識] I went to ～., I enjoyed ～., I ate ～., It was ～. およびその関連語句などを<u>正しく</u>理解している。</p> <p>[技能] I went to ～., I enjoyed ～., I ate ～., It was ～. およびその関連語句などを用いて、<u>お互いの考えや気持ちなどを正しく</u>話す技能を身に付けている。</p>	<p>[知識] I went to ～., I enjoyed ～., I ate ～., It was ～. およびその関連語句などについて<u>おおよそ</u>理解している。</p> <p>[技能] I went to ～., I enjoyed ～., I ate ～., It was ～. およびその関連語句などを<u>相手に伝わる程度</u>に用いて、<u>お互いの考えや気持ちなどを話す技能を身に付けている。</u></p>	B評価に満たない
思考・判断・表現	<p>コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、日常生活に関する身近で簡単な事柄や自分のことについて話している。身近で簡単な事柄についての自分の考えや気持ちなどを話している。</p>	<p>自分のことを伝え、相手のことをよく知るために、自分たちの夏休みの思い出を紹介することなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、<u>お互いの考えや気持ちなどを話している。</u></p>	<p>自分のことを<u>より</u>伝え、相手のことを<u>より</u>よく知るために、<u>自分たちの夏休みの思い出を紹介することなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、お互いの考えや気持ちなどを話している。</u></p>	<p>自分のことを伝え、相手のことをよく知るために、自分たちの夏休みの思い出を紹介することなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、<u>お互いの考えや気持ちなどを話している。</u></p>	B評価に満たない
主体的に学習に取り組む態度	<p>外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら主体的に英語を用いて話そうとしている。</p>	<p>自分のことを伝え、相手のことをよく知るために、自分たちの夏休みの思い出を紹介することなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、<u>お互いの考えや気持ちなどを話そうとしている。</u></p>	<p>自分のことを<u>より</u>伝え、相手のことを<u>より</u>よく知るために、<u>自分たちの夏休みの思い出を紹介することなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、お互いの考えや気持ちなどを話そうとしている。</u></p>	<p>自分のことを伝え、相手のことをよく知るために、自分たちの夏休みの思い出を紹介することなどについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、<u>お互いの考えや気持ちなどを話そうとしている。</u></p>	B評価に満たない

- ※ 「知識・技能」について「正しい」は100%正しい場合とする。一カ所でも間違っていれば「おおよそ」と考える。
- ※ 「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の「より」は、「情報の追加」及び「相手への問いかけ」とする。
- ※ 「主体的に学習に取り組む態度」の「より」には、スピーチ後の質疑応答のようなやり取りも含む。

表5 2021年度用評価研修用動画の内容

児童役1 ※モデル例1を参考に作成

[知:A 思:B 主:B]

① Hi, everyone. I went to my grandmother's house. I enjoyed talking. I ate *temakizushi*. It was delicious. Thank you for listening.

[知:A 思:A 主:A]

② Hi, everyone. I went to my grandmother's house with my brother. I enjoyed talking. I enjoyed cooking dinner, too. I ate *temakizushi*. It was delicious. Thank you for listening.

[知:B 思:A 主:A]

③ Hi, everyone. I went to my grandmother's house with my brother. I enjoyed talking. I enjoyed cook dinner, too. I ate *temakizushi*. It's delicious. Thank you for listening.

[知:B 思:C 主:C]

④ Hi, everyone. I went to ... (戸惑いながら) my grandmother's house. (視線をさまよわせ、しばらくの間。その後原稿を見て思い出したように) I ate *temakizushi*. (再度視線をさまよわせ) Thank you for (しばらくの間) listening.

児童役2 ※モデル例2を参考に作成

[知:A 思:B 主:B]

⑤ Hi, everyone. I went to Mt. Fuji. It was beautiful. I enjoyed climbing Mt. Fuji. It was exciting. Thank you for listening.

[知:A 思:A 主:A]

⑥ Hi, everyone. I went to Mt. Fuji by car. It was beautiful. I enjoyed climbing Mt. Fuji with my family. It was exciting. Do you have any questions? OK? Thank you for listening.

[知:A 思:B 主:A]

⑦ Hi, everyone. I went to Mt. Fuji. It was beautiful. I enjoyed climbing Mt. Fuji. It was exciting. Do you have any questions? (How was the weather?) It was sunny. OK? Thank you for listening.

児童役3 ※モデル例1を参考に作成

[知:A 思:B 主:B]

⑧ Hi, everyone. I went to Yokohama. I enjoyed shopping. I ate *shao mai* (シュウマイ). It was great. Thank you for listening.

[知:B 思:B 主:B]

⑨ Hi, everyone. I went to Yokohama. I enjoyed (戸惑って少し間があき) go shopping. I ate *shao mai*. It was great. Thank you for listening.

[知:C 思:B 主:B]

⑩ Hi, everyone. I went to Yokohama. I (少しの間) enjoyed go shopping. I (少しの間) er (少し長めの間) shao mai. It's great. Thank you for listening.

※ 本文中の下線は、A評価と判断する部分を表す。

※ 本文中の波線は、C評価と判断する部分を表す。

2 研修における評価演習中の活動

はじめに、児童役1から3までの、ABB評価となるスピーチ動画①⑤⑧を全員で視聴し、教科書のモデル文を踏まえたスピーチについて共通するイメージをもった。その後、「AAA評価となるスピーチ②⑥」「評価が混在するスピーチ」の順に視聴した。

各スピーチ動画を視聴した後の評価演習は、以下の順で行われた。

[評価演習の順]

- 1) 個人で評価
- 2) ペアまたはグループで、それぞれの評価とその理由の確認
- 3) ペアまたはグループによる評価とその理由の決定
- 4) 一部のペアまたはグループによる発表
- 5) 筆者ら研修講師からの解説

3 評価演習における参加者の様子

モデル文を参考にしたスピーチ①⑤⑧がABB評価になることについて、参加者が納得をする様子が見られた。また、AAA評価となるスピーチ②⑥については、多くの参加者が戸惑うことなく評価をする様子が見られた。しかし、「知識・技能」がB評価になるスピーチ③④⑨について、はじめは一度の動画視聴でその判断をすることについて困難な様子が見られた。しかし、徐々に聞き取るとよい部分を把握することができ、最後には多くの参加者が一度の動画視聴でBと評価をすることができた。

4 アンケート結果及び考察

評価演習後、「評価 VTR に関するアンケート」を行った。アンケートは選択回答式と自由記述式とした。選択回答式の結果については表6のようになった。

表6 「各評価項目について理解しやすかったかどうか」に関するアンケート結果 (n = 27)

項目	はい	どちらでもない	いいえ
知識・技能	26	1	0
思考・判断・表現	24	3	0
主体的に学習に取り組む態度	15	7	5

「知識・技能」については、「文法として正しくない」「語が抜け落ちているため意味がつかめない」という明確な判断基準があることから、参加者は評価をしやすいようであった。同様に、「思考・判断・表現」については、「モデル文よりも情報が多いか少ないか」という明確な判断基準があることから、参加者は評価をしやすいようであった。

しかし、「主体的に学習に取り組む態度」の評価については、「どちらでもない」「いいえ」の回答が多く見られた。

「主体的に学習に取り組む態度」に「はい」と回答をした参加者の自由記述回答には、以下のような意見が書かれていた。

- ア) 最初の3つのVTRと比較することで主体的な態度も評価しやすかった。

一方で、「主体的に学習に取り組む態度」に「どちらでもない」「いいえ」と回答をした参加者の自由記述回答の中で、この観点の評価に関わる意見には以下のようなものがあった。

- イ) 「主体的に…」の評価がやはり難しいなと思いました。
- ウ) 知識・技能と思考・判断・表現の評価についてVTRを見てよく分かりました。主体的に学習に取り組む態度についての評価の基準もVTRでポイントを押さえながら知りたいです。
- エ) 主体的に学習に取り組む態度の評価が、それぞれの生徒についてなぜそうなったかを知りたかった。
- カ) 「主体的に」が、基準の段階で他と比べるとあいまいな感じになっているので評価しにくかった。
- ク) 思考・判断・表現と主体的に学習に取り組む態度の違いがもう少しはっきりと分かると評価しやすかったと思います。

前学習指導要領までの「関心・意欲・態度」の評価では、淀みなくスピーチができている学習者にはA評価を与える様子が見られた。また、英語が苦手であるにもかかわらず頑張って話そうとしている学習者に高い評価を与える様子も見られた。この「関心・意欲・態度」の評価の考え方から今回のスピーチを評価すると、B評価のスピーチの多くがA評価になると考えられる。ウ)、エ)の記述のみからでは、ここで述べたような評価方法の混同による疑問が参加者にあったかどうかは明確ではない。しかし、当日研修を担当した第一執筆者が、ア)の意見にあるように、例えば②⑥のスピーチをB基準のスピーチ①⑤と丁寧と比較していくことで、より理解が得られたのではないかと考える。

また、カ)の意見からは、児童役2の[知：A 思：B 主：A]となるスピーチ⑦の評価について疑問を持っている様子を伺うことができる。第Ⅲ章2で、自分のことをより伝えるために他者へ“Do you have any questions?”と問うことで「主体的に学習に取り組む態度」がA評価となる動画も作成したことと、その際

の「思考・判断・表現」の評価について、話者自身からより詳しい情報を提示するわけではないためB評価とするが、これをA評価とするかどうかは議論が必要と考えるということを述べている。聞き手に質問をするという行為は、より自分のことを伝えたいと話者が考えていることから、主体的に学習に取り組む態度はA評価で妥当であろう。しかし、今回、「結果として聞き手から質問が出て話者が答える」場合と、そもそも質問が出ない場合とでは、「自分のことをより伝える」という点に差が出てしまうことから、一律にB評価になるという判断をした。この判断が妥当であるかどうか、今後さらなる事例を調査していきたい。

また、「自分のことをより伝えようとした」という態度の結果として「自分のことをより伝えることができた」という評価の順番、つまり、「主体的に学習に取り組む態度」の評価が先にあり、「思考・判断・表現」の評価がそれに続くという事例をより多く提示する必要があったと思われる。今回は、「より伝えようとした」結果「より伝えることができた」という「主：A 思：A」という例を多く扱い、「より伝えようとした」が「できなかった」という「主：A 思：B」という事例を提示することができなかった。この点にも改善の余地があると考えられる。

## V 今後の課題

2021年度は非言語に関わる観点を意図的にスピーチに組み込むことはしなかった。しかし、児童役の学生の視線がわずかにカメラからずれた姿を見て、「アイコンタクトができていないため態度面で満点を与えることはできない」という意見を耳にした。前章の考察でも述べたが、前学習指導要領までの「関心・意欲・態度」の評価方法を、現行の「主体的に学習に取り組む態度」の評価でも用いている教員はいるであろう。現行の学習指導要領では、「解説」の中で非言語に関わる指導の必要性は述べられているものの、評価の対象とはしていない。この点を正しく伝える評価研修を行う必要があると思われる。

「知識・技能」や「思考・判断・表現」の評価に関しては、今回の研修で参加者からの理解が得られた。

「主体的に学習に取り組む態度」に関して、新学習指導要領で求められている考え方を学校現場の教員に理解してもらえるような資料及び動画の作成について、今後も検討をしていきたい。

## 引用・参考文献

- 1) 国立教育政策研究所教育課程研究センター(2020)『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 小学校外国語・外国語活動編』, 東洋館出版社
- 2) 横坂真優・松崎邦守(2021)「次への意欲づけを

- 目指しルーブリックを活用した小学校外国語科の単元設計」日本教育工学会研究報告集 2021(2), 17-23.
- 3) 岡崎浩幸・清水義彦・押田正子 (2021) 「小学校外国語科スピーキング・パフォーマンス評価に関する実践研究」富山大学人間発達科学部紀要 15(2), 117-127.
  - 4) 赤沢真世 (2021) 「小学校外国語科教科書におけるパフォーマンス課題の検討と求められる評価の工夫」佛教大学教育学部学会紀要(20), 11-26.
  - 5) 大田亜紀 (2020) 「小学校外国語教育における評価の在り方: 先行実施校における校内研修を通して」別府大学短期大学部『初等教育: 教育と実践』(44), 49-56.
  - 6) 山形県教育庁義務教育課「小学校外国語科 ～指導と評価の一体化に向けて～」<https://www.pref.yamagata.jp/documents/20545/leaflet5.pdf> (参照日: 2021年11月27日)
  - 7) 熊本県教育庁教育指導局義務教育課「外国語活動・外国語科」<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/65581.pdf> (参照日: 2021年11月27日)
  - 8) 松井孝彦・松井千代・杉浦正成・白鳥晃紀・瀬瀬将志「小学校外国語「話す」領域における評価のための、教員研修用ビデオの作成と試行」愛知教育大学教職キャリアセンター紀要(3), 53-58.
  - 9) 松井孝彦・松井千代・瀬瀬将志・白井菜々子・都築雄也・永田眞子「小学校外国語「話すこと」と「自己調整学習」の評価のための教員研修: 研修用動画の作成と活用」愛知教育大学教職キャリアセンター紀要(5), 211-216.
  - 10) 文部科学省 (2008) 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」
  - 11) 文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領 (平成29年度告示) 解説 外国語活動・外国語編」
  - 12) 東京書籍『NEW HORIZON Elementary 6』令和2年度版